

リ此ノ如ク幾多ノ辛苦ノ余、路ヲ誤ラズ午后四時微温湯ニ着ス脇水氏已ニ茲ニ在リ互ニ其再會ヲ喜ビ直ニ衣ヲ脱シテ沐浴シ新衣ヲ着ス此ニ至テ生氣始メテ生ズ  
微温湯ハ山間ノ一小温泉ニシテ平素農家ノ客ノミヲ泊セシムルヲ以テ不潔甚シ且ツ名ノ如ク溫度最モ低ク別ニ之ヲ沸シ浴湯ニ供ス湯ハ酸性ナリ已ニシテ學友比企、西和田、岩岡三氏探檢ヲ終リ來リ會ス是ニ於テ同學生都合七人團欒シテ快談數刻十時寢ニ就ク

廿五日半晴午前六時十分前ヲ以テ微温湯ヲ發ス福鳴ニ向フ之ヨリ道路漸々平坦トナリ步行稍々便ナリ顧レバ一切經山巍然トシテ雲表ニ聳ヘ時々轟々鳴動シ恰モ余輩ノ行ヲ送ル者ノ如シ始原紀ノ岩石ヨリ成ル阿武隈高原ハ遙ニ烟雲杳靄ノ問ニ出沒シ地平線上巍然トシテ屹立ス蓋シ此ノ如ク持上グラレテ見ユルハ我居ル所ノ地甚タ高ク從テ空氣稀薄ニシテ下ヨリ來ル光線ハ屈折スルニ由ルナリ九時福島ニ着シ小藤教授山崎清水二氏ト會ス微温湯ヨリ福鳴ニ至ル行程五里半三時間余ヲ以テ之ニ達スルヲ得タリ十時十分漁車壠釜ヨリ來ル一同之ニ搭ズ上野停車場ニ達スル巳ニ午后七時五十分ナリ

## 吉田松陰

杉山富橿

吉田富次郎名は矩方字は義卿松陰と號す、長州萩の藩士など、幼より穎悟にして謹慎、德は以て人を玄て欽慕措く能はざらしむるに足り、學は以て經世の志望を輔翼するに餘あり、傳へ云ふ年十一にして藩侯慶親公に召され、武教全書を講じ、辯說爽快毫も滛滯する所なかりしと、松陰既に長じて國事日に月に紛擾するを見、慨然として深く覺悟する所あり、精しく内外の形勢を觀察し、社會の警醒者たるを以て任し、或は九州の志士を訪問して知見を博め、或は東海の兵備を巡察して實際を鑒み、對

外内治の政策を講究せり、象山の英傑偉人たるを聞くや往て教を受く、相見るよ及んで意氣投合怡も舊知の如し、蓋し松陰が其議論性行に於て象山に感化を受けたるあと實に鮮アラカルとせず、渠等は師弟の關係を有せると今時より親友の交情を有せど、安政の際に松陰切に時勢に感じ海外に航するの志あり、象山も亦た之を従属す、是に於て晝夜兼行陰に長崎に抵る、至きば則ち魯艦既アリ去りて志を果す能はず、悵然江戸に歸る、會ま米艦下田に來り舶するを聞き往て奔走する所ありしが、終に幕吏の抑制する所となり、郷里に禁錮せらる、輒ち子弟を集め慇懃之を薰陶し以て大志を托するあらんとす、後ち幕府を謀るの故を以て獄に下り、安政六年終に死刑に處せらる、時に享年僅に二十有九、

松陰江戸に護送せらる刑に處せらるゝや、此報傳へて信陽に至る、象山潛然として嘆じて曰く、義卿は事業に急なり、吾嘗て之を用て偉功を成さんとせど、噫今已ぬる哉と、實に松陰は幾分か急峻の性質を有し他人に比して一層強情なりき、渠が冬夜怒濤の捲くとも厭はず北海を佐渡に渡りたるが如き、其積雪山野を没するの時に當り、單身大剣を横へて東北地方を跋涉したるが如き、其海外に赴かんとして友人の之を止めしき、我が志既に決せり仮令ひ刀水逆流するも富岳海に移るも我が志は變すべからずと大喝したるが如き以て之を徵すべし、然をも是れ松陰の松陰たる本色の存する所にして、象山と其性情相投合したるものありしも之に因るものなるべし、聞く象山の姉公嘗て象山を評して曰く、象山は君子たるべき温良恭謙讓の德に乏し、其を或は非命に終らんかと、象山の性情既に斯乃如し、之より師事したる松陰焉ぞ之に感化せられざらんや、而て象山は其弟子を御すること至て嚴峻にして、越後の人傑河井繼之助の如きは、象山は師とするに足らず彼は徒に弟子に傲ると云て蹶然之を離れたる程なれども、松陰は之に反えて弟子を全輩視し、友人と稱して更に師匠振る所なく、

人を容るゝの量に於ては寧ろ廣きものありしが如し、例へば象山は自ら知らざるおとを知らずとす  
る能はず、弟子の質問を叱り去りて密かに騎して實砲を驗え來り、以て其問題に答へしが如く、渠は  
頗る高慢なる性情を有せり、然ども松陰は一種の幻力を以て弟子を導き、其書を説くや古今に出入し  
之を實事に照し、意氣軒昂聽者皆凜然として激勵奮發せざるはなく、而て親しく渠の講筵に臨みたる  
ものを玄て、其聲殷々猶ほ耳にあるを覺へしめさと云ふ、亦た以て松陰と象山とは性情の異同を見る  
べし、

松陰決然魯鑑に投せんとして長崎に赴き、機を窺て航海の素志を果さんとせし時一友人に語りて曰  
く、何ぞ醜夷を斬らざりしだと、時に松陰年壯にして血氣勃々たり、慷慨悲憤劍を按じて立つを快と  
し、切齒扼腕大和男兒の氣節を發揚せるを以て責任なりと確信したるや知るべし、渠之斯れ如く多血  
的性情と有せり、然れども渠は經綸の才なく治國の計なき人物にはあらざりしなり、渠は譁々堂々國  
家の爲めに卓策偉圖を畫出し、盤根錯節を截りて之を實行するに至らんことを熱心せり、渠當時の急  
務とする所四條を藩侯に建言して曰く、

花江書樓に御住居被遊日々群臣の朝を御覽せられ群臣衆議聞召上られ御政道御直裁被遊度段申上  
候、誠に今日を異變の初と心得治亂一途の覺悟被仰付候には、衆人の耳目を致聳動候御處置無之候  
ては不相濟事に付、花江の一策何卒急に被爲行度奉存候、乍去此段急に難爲行筋も御坐候はゞ致方  
無之、責て御書院大廣間等にて成共日々群臣の朝被御覽度奉存候、(略)

今日事務の急と奉考候は郡奉行代官御前被召出御德意被仰諭候儀に有之候、(略)誠に人君は民事  
の艱難知るし召るべきは周公の無逸にも相見候通に有之候處、閩閭田里の事は郡奉行代官に御尋

被成候外無之候、(略) 勤王の御大業御建被遊候には第一百姓の歡心を被得候では不相別事にて、牧民の職たる者御上德意得と下々へ申論さすてぞ相叶はざるに付、郡奉行代官召出を急務と奉存候、(略)

君徳の儀乍恐御勤政と御講學の二つに有之儀と奉存候、(略) 某々等は時勢に詣ひ候俗儒よて國家の大計勤王の大義等は毫も心付不申候徒に付、有損無益の人物に御坐候、已むなくんば少壯有爲のもの定員無之被召出御小姓にても無之儒官よても無之、只々平士にて御書物掛り被仰付於御前毎夜會讀會講被仰付度奉存候、

御目付方改正の事、第一御目附人選の事、人を選んとすれば員を減するに如かず、其人をあり剛直にして學問ある人を用ゆべし、(略) 第二御徒士御目附横目等も其人を選ぶべき事、(略) 員必しも備へず且つ年限勤功の法を破り其俸給を優にし云々、第三御目附數々御前に召出有之御政道の得失大臣以下の忠佞正邪言上可被仰付事、必ず剛直を忌て温恭の人を選舉すべし云々、第四非法糺彈怠るべからざる様御召出節毎に御直に被仰諭度候事、(略)

滔々數萬言或は賴襄新策法律略を引き、或は舜典洪範大禹謨を考へ、或は史記唐書より例を探りて其方略の得失を論明し、懲懃其實行施設を請願す、亦た以て松陰が治國經世の籌謀を推知するに足る、之を今日の政治家を以て許さるゝ者に照らし來れば果して如何、

抑も幕府が外交の難局に處して苦心せし時や、實に我邦の状態は沈靜腐敗の極に達致、三百の諸侯は各儼然として其位に備れりと雖も、多くは魯鈍にして天下の大政を行ふに足らず、之を輔翼し以て其君を堯舜にすべき責任ある家老の如きものは、徒に先代の官職を襲みて大政を整理する所以の道

を知らず、少壯有爲の士と之を卑下して、渠小官なり用ゆ可らず渠格式なし職に當る能はずとなす、文學問の如きも惟に文辭の一方に偏局し、楓橋夜泊の詩を解するに三年か歲月を費し、日新又日新的句を解するに一年の力を極めたる如き儒者を生じ、經世の學寥然として地を掃ひ、天下の道德を維持すべき宗教も熊澤蕃山が、北狄來るか大飢饉あるか國家多難の時に流賊となる者は此數万人の出家ならんとまでに云へる狀態に沈淪せり、而て一身死生の際に從容談笑し、刀劍馬蹄にかけて天下を取り、四方の諸侯をして風を聞いて戰慄せしめたる三河武士の氣骨節操は、二百餘年後の當時に至りては墮落の極に達して幕下に之を見る能はず、斯の如く、當時の形勢と彼の十八世紀中葉後に於ける佛國の如く、早晚一大變動の次ぎ来るの止むべからざる有様なぞ。

而玄て國內の太平は外交事件によりて破られ、囂々又擾々、人心の紛亂は恰も鼎の沸くが如く、英偉卓絶なる人物は挺身國難に關係するの止む可らざるに至れり、此時に當りて天下の說客策士能く事理の是非を辨じ、計謀の得失を認めて以て之を主張せし者果して幾何ぞ、彼等多くは殆んど雷同附和唯だ一個の空想妄念によりて天下の人心を亂擾するのみ、松陰固より年壯に多血的性情を有せしが故に悲憤慷慨劍を按じて起たざるを得ざりしと雖も、渠は徒に悲憤し空く慷慨せざりき、渠は一念確く信ずる所あらずて、其の卓策偉圖を實行せんが爲めよ慷慨悲憤し、而して其の熱心を以て四方に奔走し、身は逆境に立つに至れるも敢て恐れず、艱難は來りて身を圍繞するも泰然之に堪ゆるを得たり、わゝ渠は實に實際的經世家たるの資格を有せり、吾人は其事業と其議論とを對照して確かに之を知るを得るなり、

元祿の頃より天下は靡然として榮華の夢に耽り奢侈の流に溺れ、人を斬り身を護るの刀劍は今や黃

金を鏤めて人に誇るの具と化し、壯大なる建築は遊宴の用に供する爲めに造営せられ、茶の湯挿花の技は愈々巧妙に進み、士大夫は縮緬の覆面を被りて道を行き、晝夜樓臺に謠歌彈琴して世事を厭ふの状あり、斯の如くして上の好む所下之より甚きものあるは免る可らざる所にして、社會は舉世此濁流に浮沈せり、蓋し是れ羅馬亡滅の覆轍を踏まんとせるものにして、志ある者豈に之を見て慨歎せざるを得んや、松陰は偏く天下を週遊して天下の形勢正に衰頽の兆を表はせるを察え、人民は華奢に流を政治は繁縟よ失毛るを歎じ、熱心に之を救濟せんことを努めたり、讀綱鑑錄にも渠附言迄て云へる二三の節に此事を説破せり、曰く、

按商家風俗實に美なり、風俗を美にせんとならば、平時氣節を尙ぶに如くはなし、氣節を尙ぶは勤儉と勵すと直言讐議を奨むるに如くなれ、且商の大に美とすべきは紂の惡虐すら猶自焚而死人君社稷に死するの義あらず、桀の及戰不勝、奔於三股之國、湯又從而伐之、放於南巢、三歲死于亭山と同日の論にあらず、周の末主に至ては何ぞ齒牙に掛るに足らんや、余常云亡國の主能其正を失はざるは商紂と明の崇禎のみ、飯田翁嘗て儉勤を以て國を建る者必ず國力盛強、英主迭出、國祚甚修からずと雖も、亡に至る迄競さるの患なし、我北條氏と彼殷氏を以て知るべしと此言事以て信然とす、商周の得失政をなす者宜しく注意すべし、余常に商の質朴剛毅を尙ぶ、今れ君子は皆周家の文章繁縟を好む、是を以て政日に振はず廢れて至弱の國となる、昔吾王家の衰蓋し斯の如し、今又其覆轍を踐む悲夫々々、

按召公の尊貴蓋し周公太公に比す、然るに巡行鄉邑聽斷於隴陌阡畝之間云々とは何等の簡易民に親乞きや、今の代官にても加様にはすることを得ず、况諸侯以上に於てをや其甘棠の民に思はるゝ

なき先亦宜ならずや、周公曰夫政不簡不易民不能近、平易近民々必歸之と說者周を以て文章繁縝となす而も尙如此、況や后稷公劉大王文王の時をや、聖人の書を讀むからは少く聖人の眞似をしたきことならずや、

齊人立其弟燶公大布之衣大帛之冠、務材訓農通商惠工敬教勸學授方任能、元年革車三十乘季年乃三百乘云々、布衣帛冠文公勤儉の状想見るべし、是に非ずむば安ぞ能く破敗の餘を收拾して其國を建立することを得んや、亦所謂嘗膳坐薪の儔なり、今日國事艱難而て昇平の久百物豐備一の欠立なし、人君布衣帛冠嘗膳坐薪せんと欲すと雖も勢能し難き者あり、是勤王華弊一事の効を見ることなくして淪胥以喪を救ふべからざる所以なり悲夫々々、  
松陰は極めて自信の精神に富めり、渠々事業餘々に過激なるが如く見ゆるも蓋し之が爲め也、渠は自ら信すること篤うりしが故に、其計畫せる所は何處までも貫徹せんとせり、渠が辛苦に堪へし所以の者も、自ら天寵を荷へることを信する厚かよしに因る、渠が其肖像に自贊を記して云へる末節に曰く、

猛氣廿一回、人譏狂頑兮、鄉黨衆不容、身許家國兮、生死吾奚疑、至誠不動兮、自古未來之有、  
古人難及兮、聖賢敢追倍、

渠が國家の爲めに至誠を致し、世人の譏笑を顧みず、生死の際に在りて從容たるを得しものありしを以て之を見るも、其自信の精神の確乎たりしを想見するに足る、凡る社會に出でゝ改革の事業を取らんと欲する者は、此の如き確乎たる自信の精神なくむば成功を期望する殆んど益なし、思はざる可んや、然り而して渠が信念の篤實なる吾人をして感嘆措く能ざらしむる者あり、渠幽囚中の書牘の一

に曰く、

天照の神勅に日嗣の隆興天壤無窮と有之候處、神勅相違なけば日本は未だ亡びず、日本未だ亡びざれば正氣重て發生の時は必ずある也、只今の時勢に顧着するは神勅を疑ふの罪輕かゝざるなり」  
皇神の誓ひおきたる國なれば、正しき道のいかで絶ゆべき、  
道まる人も時には埋れども、みちし絶へねばあらばれもせめ、

又幽囚の憂苦を慰むるの詩に曰く、

生死由來任所宜、樂夫天命復奚疑、  
皇道陵夷々狄熾、欲成日本真男兒、

吾人は今渠と時代及境遇を異にするを以て其事業を學ぶ可らずと雖も、其の精神心術に至りては十分に近似する所なうる可らず、殊よ吾人は今日我が邦文明の建設的事業に從事せんおとことを責任とまる者なれば深く松陰の精神を學ばざる可らず、  
松陰没する時齡僅かに二十有九に過ぎざりしと雖も、終身の事業と功績とを以て之を云へば實に百歳の人と云ふて可なり、其忠孝熟誠の行と其感化薰陶の功とに至りては、以て經世家及び教育家に摸範とするに餘あり、之を聞く松陰居常言行肅正人に接するに一に誠意を盡し人を教ゆる太だ懇切なりしを以て、業を受くる者其威徳に化し其性行に倣はざるはなかりぞと云ふ、惜ひ哉國事多難なる時に際し志を伸ぶる能はずして、空しく武藏野の露と消へ去る、然りと雖も勇將の下に弱卒なし、果せる哉高杉久坂入江寺鷗來原松浦伊藤山田野村の俊才を其門下に出し、渠等によりて明治維新の大業に關係し宿望を遂くるを得たり、亦た以て瞑すべし、

今や我が邦の狀態を觀るに、血氣ある者は壯士となり、血氣なき者は姑息に流れ、學識あるものは祿

蟲となり、才智あるものは策士となり、眞正の経綸を以て治國の事業を執るもけなく、精神的教育によりて英才を養成せんと欲する者誠に鮮し、豈に亦さ悲しからずや、余幼より郷里にありて、我が人傑松陰の事業功績を聞く甚だ屢なりき、故を以て余深く之を心に銘して常に欽慕措く能はず、此頃感ずる所あり、聊か渠の性行を探り其神精を究めて一班を述ぶ、蓋し止むを得ざればなり、

### 郡司大尉の壯舉に就て

客員 江の嶋漁夫

福嶋中佐西比利亞旅行と郡司大尉千嶋移住は天下の二大壯事而して不幸は千嶋遠征の一行に落ち来れり二隻の艇と其艇員とは狂風の爲めに陸奥海上波際の泡と消へ大尉の壯圖よ一大頓挫を與へたり世人或は艇員の不熟練を疑ふものあり余思ふに大尉の此行を企つるや財資雄圖に副はす大尉は止むを得ずして通常の艇種を以て此嶮艱を冒さんとせり北海の怒浪常に嶮惡况んや一朝風力の之を助くるあらば輕舸豈に堪ぬべけんや大尉善く之を知るもや明なり其資財の許す限り之艇種を撰びしや又明なり而して猶ほ艇の脆弱を知ると雖も艇員の熟練を信するが故に敢て嶮を冒かせり而玄て遂に此不幸に遇ふ豈に悲しまざる可けんや陸中の人某氏送るに「スクーナー」形船を以てせり然れども景慕感謝すべきは其義心のみ其船種の如きは事に堪ゆるの類にあらざり玄ならん遂に九名の有爲者を載せて覆没の不幸に遇ふ大尉の悲痛送遺者の遺憾如何んどや大尉の東京を發するや世人は非常の盛典を以て氏を送り然れども一人の堅牢の船舶を送れるものなし世よは口國家に忠なりと稱するの人數万金を費や玄て私邸を構へ富貴榮華を極むることをなすも一人の大尉の此邦家の爲めに奮然決行せんとするの壯舉よ義捐する者なし余は之を英人に聞く密獣船は我北海に來り玄と年古りし事にあ